

平成 21 年度児童文学連続講座 ヤングアダルト文学

出版のジャンルとして定着したYA。1960年代、1970年代のアメリカの初期の先駆的な作品群のようなリアリズムの「問題小説」(problem novel)を離れて、ファンタジーやエンターテインメントにまで多様化。そのぶん、本質が見えにくくなった。そこで、考察の対象を絞り込んで、YAというジャンルの「根本動機」をたしかめることにする。

0. 前提：1983年の定義

「《Y・A》Young Adult Literature の略。若者が直面するさまざまな問題をテーマに描かれたヴィヴィッドな現代アメリカ青春文学の総称」(『非行少年』S・E・ヒントンの、中田耕治訳、集英社文庫[1983年、原書1968年]、文庫本カバー袖の説明文。)

1. 『アウトサイダーズ』(S・E・ヒントンの、1967年)

「メキシコ系貧困家庭の息子たちグリーサーズと白人上流家庭のソックスとの間で繰りひろげられる血で血を洗う抗争を描いた」(唐沢則幸)。①悲劇、②社会的構造、③当事者の年齢の作者、④青春の光と影のコントラスト、⑤「殺す権力」という古典的な例、⑥男の子の世界。

2. 『レモネードを作ろう』(ヴァージニア・ユウワー・ウルフ、1993年)

10代の矛盾、生物的には新しい家族を営みうる潜在力をもっているにも拘らず社会的に自己決定＝自己責任の主体と見なされない矛盾の滞留＝時間。①「スラム」という社会構造の問題の共通性、②「性」の問題、③女の子の世界、④一人称の短い文章の文体(読みやすさ)、⑤「福祉」という現実的な代案、⑤悲劇の回避＝幸福の約束。

3. 『ヤングアダルトサービス入門』(半田雄二、1999年)

「青春小説は人生の応援歌なのだ」。これこそがすべての基本理念ではないのか？ 以後、小説は、読者にとって人生論のフィールド(生きることを哲学する思考実験の場)となる。しかし、時代により社会により、「応援」のありように変化が生まれざるをえない。

4. 『スリースターズ』(梨屋アリエ、2007年)

3人の別様のネグレクト状態の少女。①いじめ、自殺、テロ、②「生かす権力」への抵抗、③サバイバルすること、④パンクとしてのYAはありうる？

5. 『少年少女飛行倶楽部』(加納朋子、2009年)

飛ぶためのクラブ＝サークル。「底抜けに明るい、青春物語が書きたくなりました。それも、中学生が空を飛ぶ話が。」(加納朋子) ①青春への回帰、②無駄なエネルギー消費＝消尽(バタイユ)、③スポーツものの根源、④ナンセンスとしてのYAはありうるか？

(石井直人)